



繪本孝感傳
八

~ 13
3581
8



門 13
號 3581
卷 8



孝感傳卷之八

目錄

風石東中の作

萩田有奈の妻殊右近と付圖

是殊が妻女嫁風石東中と付圖

春城右を横死の作

同其二

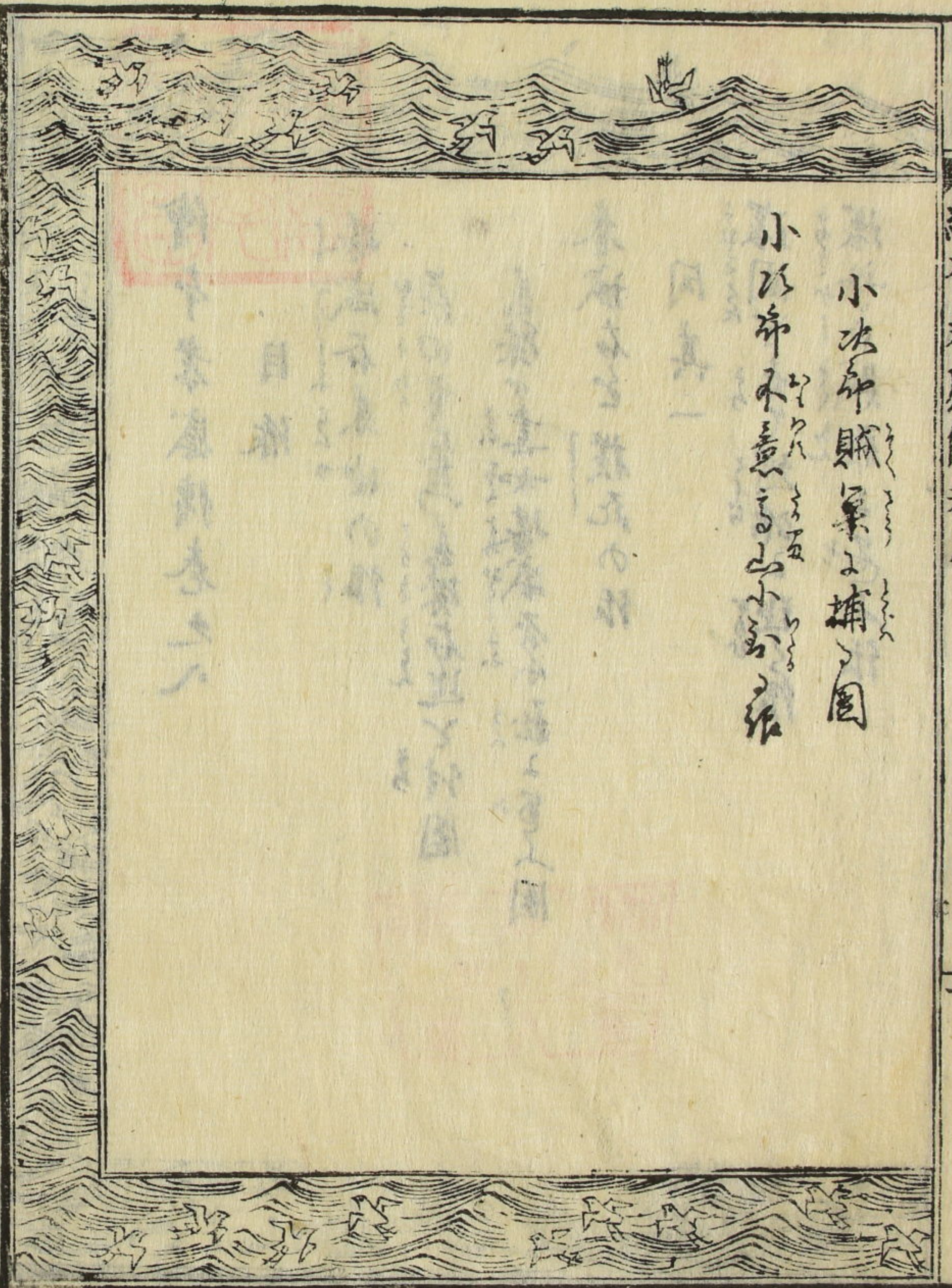
環園と云て然作と起る作

環好子賦雅と起る作

早稲田 大学 図書館
35.1.22 燮
藏 書

小次郎賊軍を捕る圖

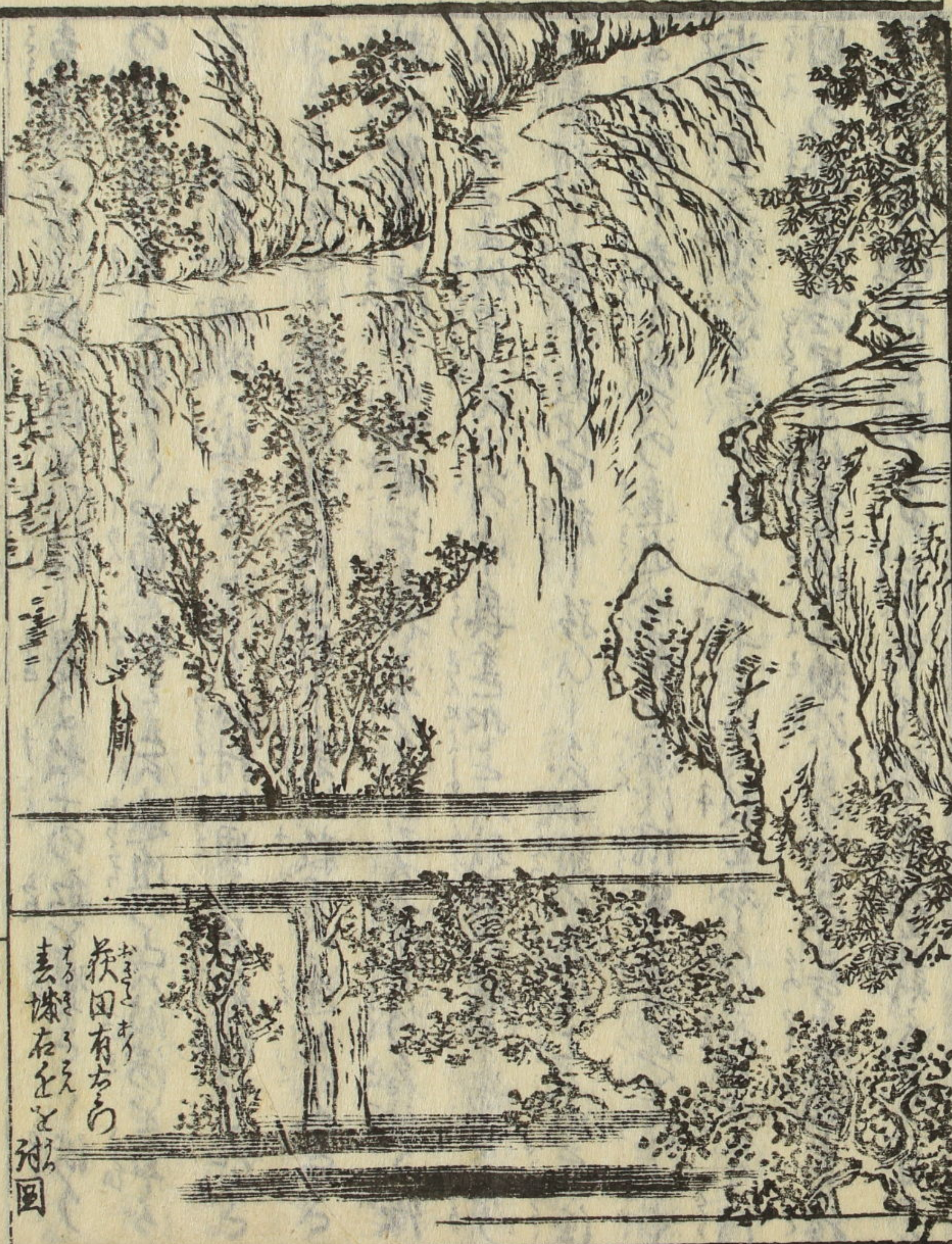
小次郎不意に山に落ち



繪本孝威傳卷之八

嫁威若來由の結

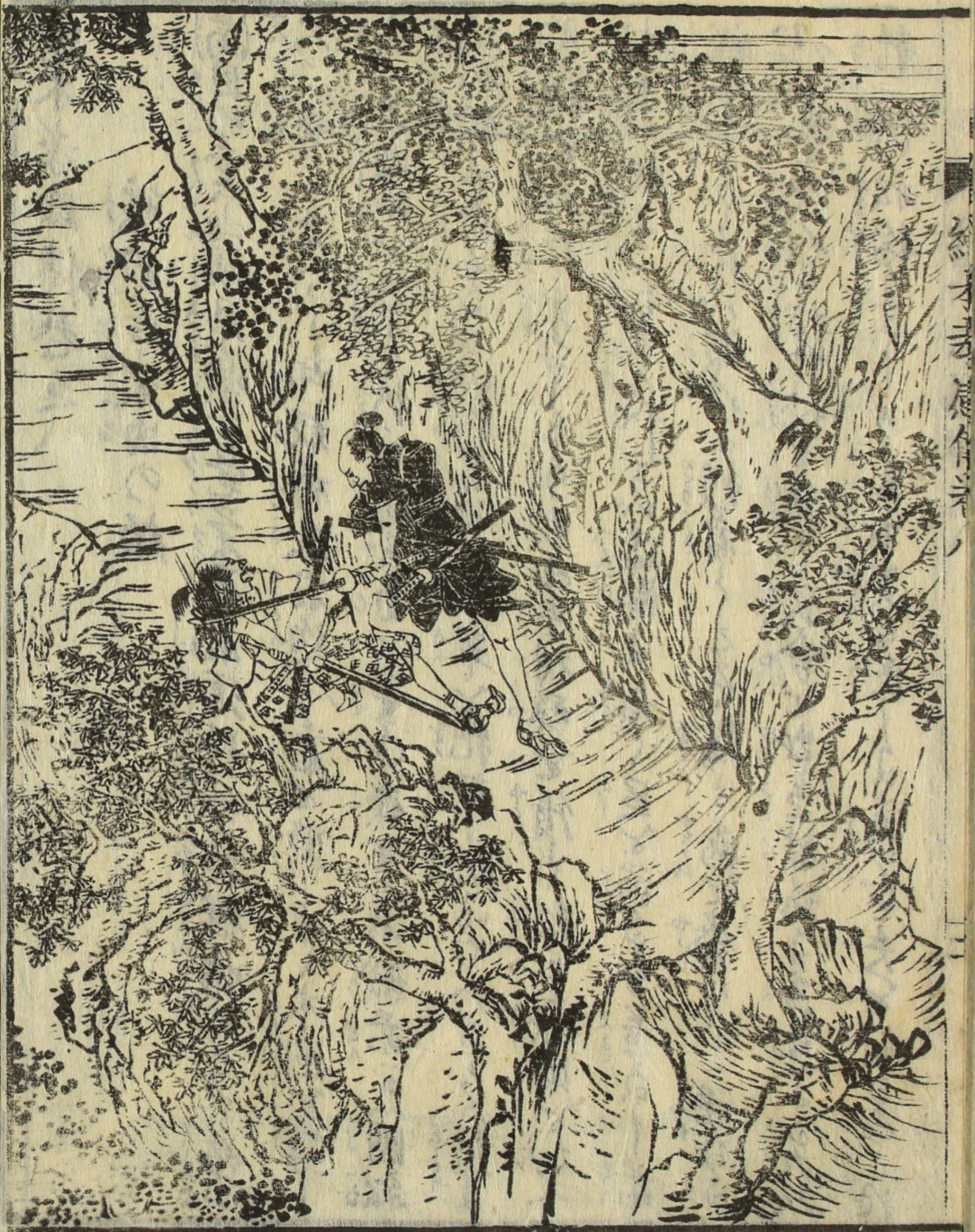
満目の雲山俱是樂一毫采辱不須驚如是襟懐何りて姫
 大丈妻と云へし却疑春珠右近去書を遺し本園を拜し
 去りぬ園海と云く初と急を日と重の夜とあり就前志園船
 橋の歌又着るるがけに客路の風寒を犯す故中や何りらん
 御痛記長はた言るるごりなきを村醫と借く教目療用を加
 かしく候ふことと云へし遠鄙又水く足と田も着るる一
 程も土をうらねば被浴は到着くこそ候病を養りんと僅るる
 御事と歩人は指せばと奥に歌舎を出る就海より着るる九
 龍川の松橋よりうらまをうらも聞くと遠くを夫と秋もつと



山崎

三

おきとあり
秋田有方の
妻據右を
遊園



山崎

急流の大河の鐵の頭と引はし是は教十の船と覺てくはり
 の便なる半は又ゆくは一面と形をまは遠近の山は波濤と事か
 ごとく両者の相樹の安樂とくは村と田を其絶勝つらん
 るるまは衣辺も連日の勢氣と教へて以て教聖の途を距る道と
 教若加賀の技する嫁威をよむと方々するもの事と形をける儀
 故と尋るは彼首一向宗の中奥並如上人教若の國を傳へ一字
 と草創し善く教化を施し移ひてふお難の道信上人の三法
 と帰依し奉り後人の遠近滄易と歎け風寒暑濕を絶く
 歩と聖人化身を受るもの幾千とふの教を知りて其が中より日
 國二の勝とふの里又住貧民と物化とふもの其妻諸も終
 其其宗の法を承るは一方るは朝は星と載てく一日を

耕織と勞務は又むすは言流は梅く上人の勸化と形を
 たり是言佛名と備念とく希有の信者ありしは其母なる
 そのい大は事異る生與懐食形見たりと夫婦の者少所業
 後世を形するは版ありてはひねりて婦り号りて言流の系流
 と田をともと勤又夫婦は偏は陳地持形の有難さを信と
 一もく母とも信くは世の果をゆせりん事を希ひ捨く言
 論はくも母は益意施の願念を致し而給傳本を以て夫
 婦が言流語と田の外のありしと密はるひと回ししけり
 以も三月廿日斗しるるを物化の幹ののありて物より形
 出く言流ありては妻も言より制のてく言流人と知行
 ぬを母今育てて形を形くは教を傳へんとて時刻を

かりて家をまき出たる神の羽は納めたる鬼女の面を奪うく秋
 の南風よまきくつる秋の髪と振れし白麻衣を彼とあまぐり
 室也らししとるつ斗又出る婦の袖の皇陰の糸もく今や
 と流布より新くは日月山の端を離るる以桑のてく婦は只猶傳
 名とるらう又唱へくゆきると見るより村分ハトトと皇中より
 女流しと夢を夜よりと叫ぶ疎出んとするは何しろしらん衣の
 裾前又胸よりくくくくくゆきと南なる肉筋のせろくともおのひ
 るん足と室ははし後とも見せどくく迹きりて新もるる老母
 の若くの西徒事とるりしと足よりくく大は嗚り被刺と影
 又踏掃さぬ目の糸をそつと修又響らんそのと南く幅一面
 と散えんとするは不之後やけ候面肉牙は骨く離るびくは

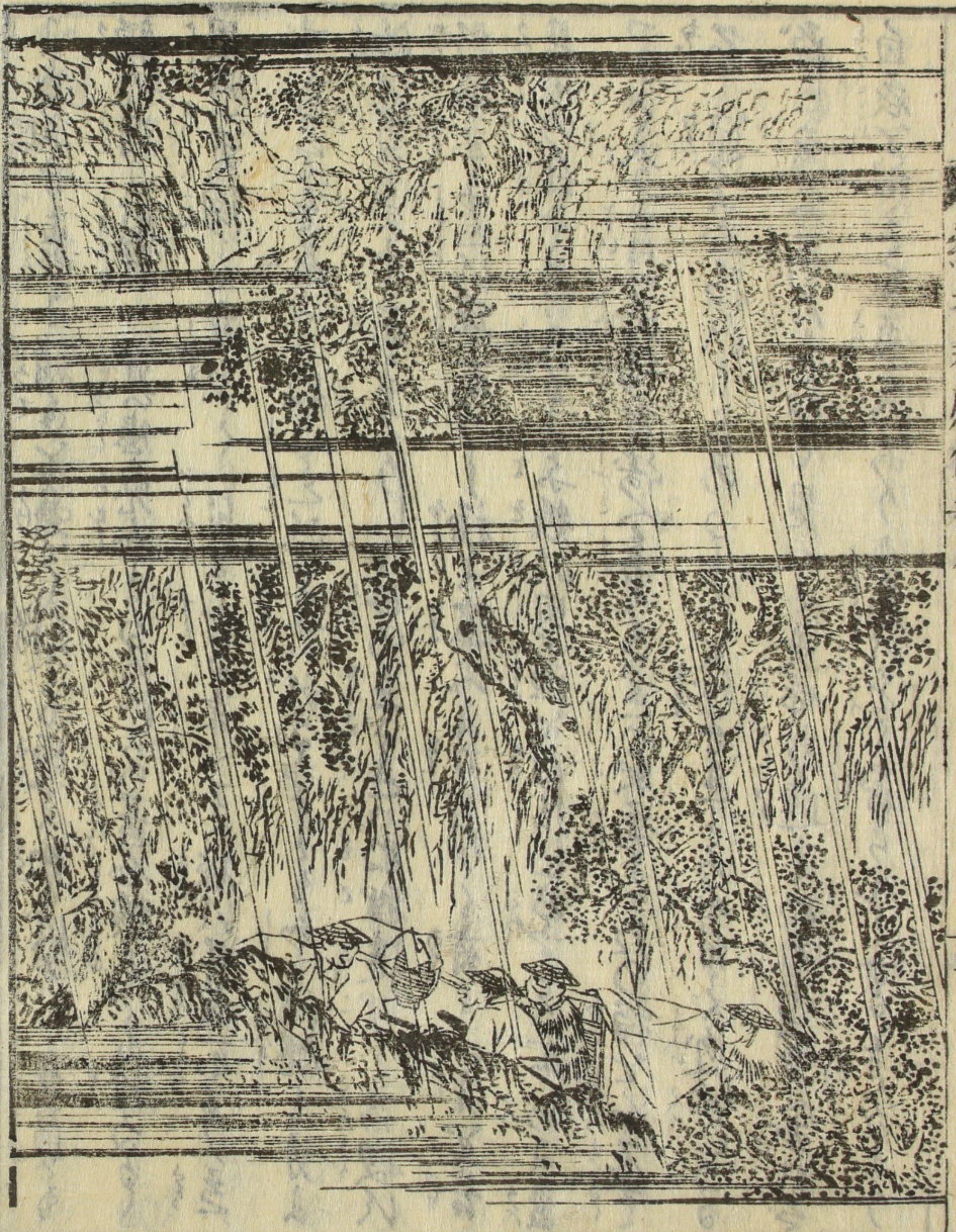
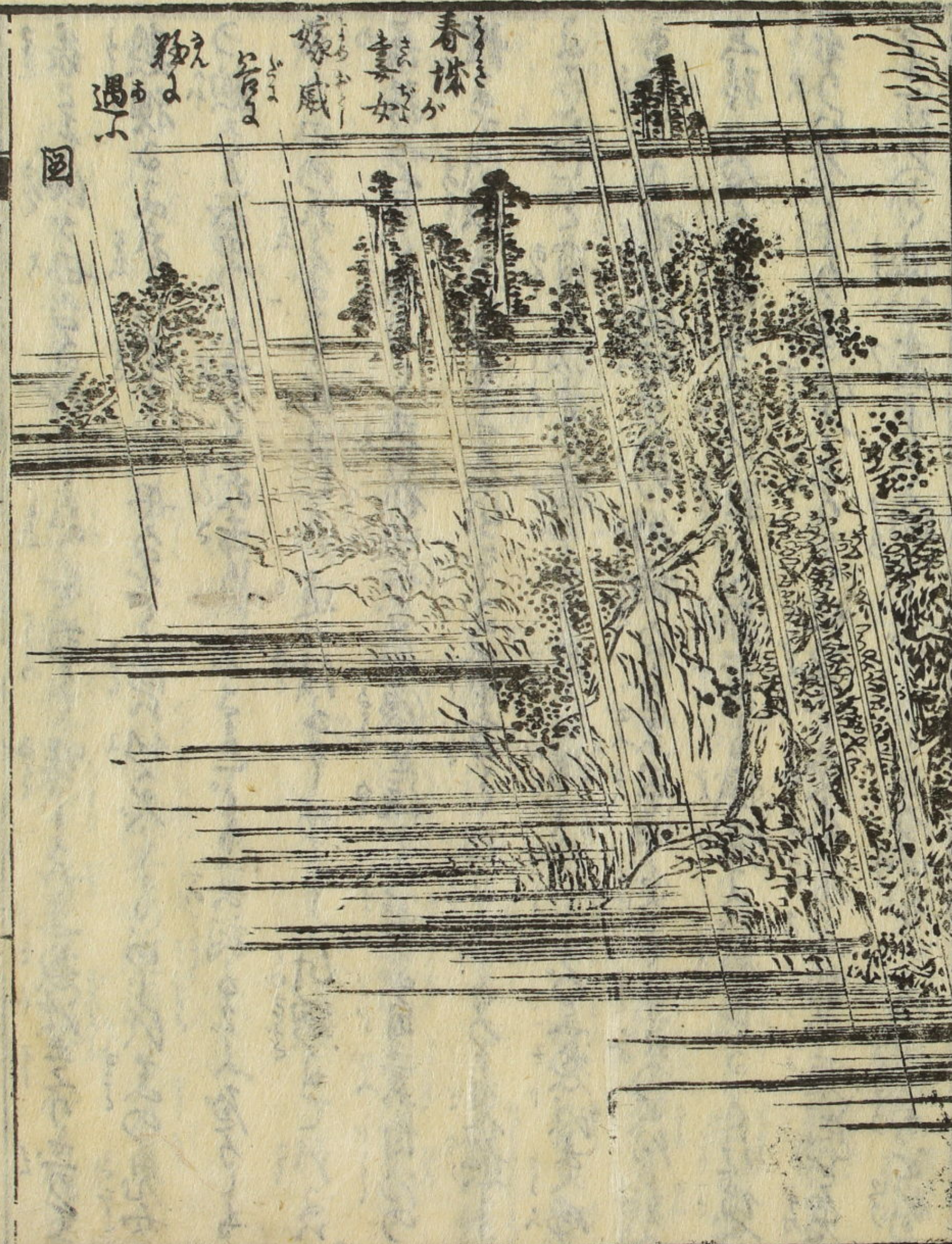
又と胸歩裏さ諸もと影く引くも更又初うげとや耳鼻も
 顔の肉は取付く其儘鬼女とるりしふ蓋心煩まとも捨るる
 果ハ一才總く麻布く一足とる事とて又能は只其一かり三
 ずくして居るぬととては毒の形も事とも影は裸も力よ
 活は急ぐく家よ之りしか母のままは那裡這裡と為搜は
 折拍とよと以隔ありし種は妻たよ力とゆく有く決意と告
 且母の在るを尋るよと物次思面と曰りしおさるる何何又
 更く今宵は汝獨を待てありとまは来るまの程とんえせ
 不一違よ出移ひしそのらんを汝とまは公付く迹悔しるる
 燈し玄末其及よ新く見んと交婦折連く那皇の亦よ取れ志
 白夜と指くしてまそのありと物次をくあらんとすると見るより

春塔
妻如
嫁威
後
遇

圖

繪本

六



繪本

五

家こそ汝が母なる哉とて泣きを絶し啼くはよ過激なりとて
 熱視るゝあつたふく母をかく形似てくもわびまの鬼女
 の顔るゝあつたふく死きりしかまども其詞もくは危くも
 るも母のあつたふくありしは遠の法より何となくけ親よてお六
 居残つてと坐るゝ君孫同くも母涙を流し愛より自業自滅の
 怪よてい形あるのゝとけいおゝ捨棄くお月あつたふく見惚
 りよとくしと有し汝身と物たりを惜び歎くはよ物に交結
 も悲しと堪いけいおゝ人形例稀るゝ業果とて更く未来とたつる
 去残たるゝ海山よけ人種と罪業も懺悔よハ滅するゝ社僧人
 承りぬ今より吾等事あり化等と受未来永劫の悪因と更
 が去残とて殊と盡しと勧くお六とてその母も死の罪業と破
 るゝ悪念をわくゝお六とて其徳両よと今をきまよ上人が罪と許せ
 残る南云河彌陀佛くゝとてそのお六とて唱つてとてお六とて石測る
 るゝ其意のトより鬼女の面破羅刹と股も足も断つと物と出
 て汝の老母の顔とるゝぬ是よお六とて三人とも又信をけよ
 お六とて相伴つてと声なきと請くゝ上人は得てとての由と音し
 母も上人の教化と受てよとて一心専修念仏の行者とありぬ性
 生の果とてお六とて是とて同く益法義の縁有とて再び垂を
 残り信くゝ今よ嫁威咎の名とて遺しとる

春城夜凶横記の終

初く石山を細呂木の歌とてお六嫁威咎の巡道よとて
 二十餘町も東らんとて胸痛再びお六は羨りお六歩ゆるはせ

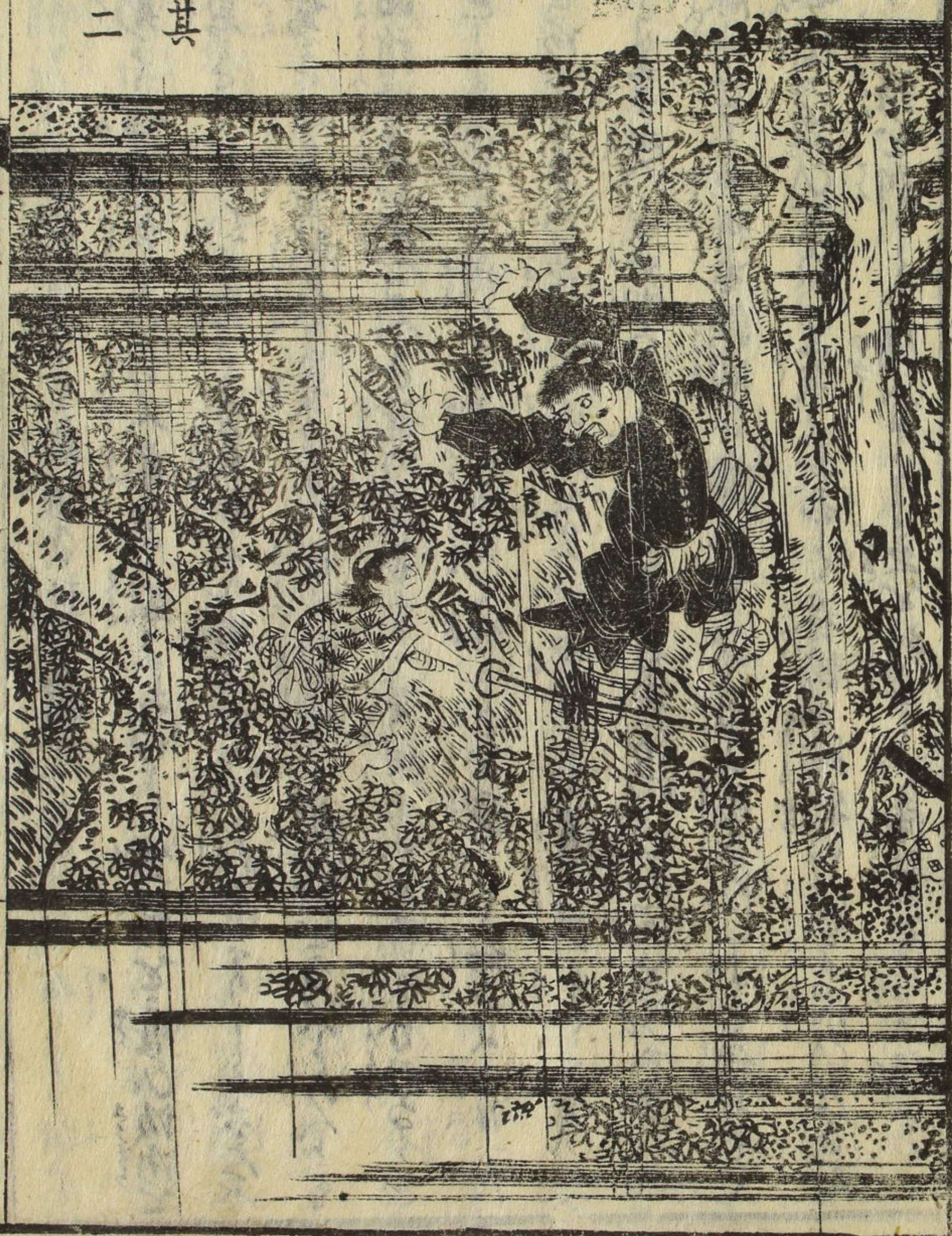
かまふぬを強く歩けりせしが故に病を引出せてゐるをうんとあ
ゆを河人の行拾町とゆひまはるは花の野に歩くと歩人の言はる
よそゆの種くともども一歩も歩半終らざるは驚く路傍に足と体
着けり茶と水と用はるも病苦の苦剣をまはるは迷ふ歩人の
叶ふまじきと申りし言り又驚きと歩む人て家やなくとも同
歩人の言と掉歩法のでらる山ゆきまは稀に農家のあまどやる
と歩む人て便いひばさきどもまはるは枝後と待らんよりある
る馬(ま)のりゆく驚きと雇種くはるはあまど人驚く待せり(と
歩人)を途と急ぐと馳りゆく右ゆき方とゆひ言歩人の言と
希と驚きやあると待候しりぬれは萩園有古傳つき思ひ負
ば本國と放逐せしき一ふ身は活し衣類佩物の敷と賣て

僅に湯費と調人取あしるまはま湯くとお籠り衆と目り種
で加賀の園大長と人と志し物と急ぐしが美討らん今日逢
ゆよあわく春休在ゆが旅の体と遠く見情宿懐忽ち後
某の流芳の身とあるも今く春休願するを起り加之楽後ひ故
糸をひ後述も糸仕官の始るらん糸染と穀日と隔く園瓜
出りよ不園も今日ひあて出遇しん疾武進の未あざる下道
ゆくと討果さんと脱し園とく退本りしが吃と思案と回し板
は同ゆるも疎るるとは若君帝の勝負よ及びるは石と取んを
必要るり紗付物せしし渠がゆきよまはるひは便よりらんを
よて足と水と討てそ糸金の針るらめと故と半町申りりおも
まはるゆくと傾け目久隠しよ暮ひありしが衣とが浴中り極

依る体と見るより天のまゝと前後と見るよおつても人の徳で
 ありしは家臣の用くつしと後につく死をぬけよ春城た
 進汝が事より起る罪をば一萩田有右清つが遺恨の刃使え
 と云ふりま二つ切附を春城をぬたりと刀の鞘をさし略す
 と精田こへるひまゝる遺恨ゆり子細と決まことと耳も
 び身も起り討程は春城も被合を秘物とをすし一宗とをま
 謀が運やまてりらん病者は通く進退自由するは萩田が
 先と交換し肩を強よ切きて憾もあひ制するを萩田するに
 系とつて肩の力は通くゆるよと云ふ一町中進出せり
 俄に惣念前して春城が佩る太刀を銀と奪りんと再びを度
 て太刀と奪ひ移金名にのりて死骸の骸と掘る杉栢人喜よ移るこ

見付らまてち事ありしと何と云ふるは又當る版抄を
 腰に挿置候とも見せしと向事一及引還しむ去町迹地一
 又向より人衆の見下しよ公等と置よも置る族は遠びんたよ
 遠よりやまて急よ側の出より根柢荊棘と押介し煙るこ
 西と幸しく細呂朱の駅よ油まば早釋のつく騒合山中は撲
 死のそのありしと見るほどよ天よ踊か心地し我と膝と見えお
 儚りよ急よと奪取し版抄色よ家臣よおける紙入とも遺
 たよハ益のと奪し一先け西と去り事細く後大長と人び
 と交より来し其よ途よ急よ望月う方よあく日國敷たよ
 着しぬきい少心と安しぬよし一し取は後舎と取病と称して
 好く返るよとるし一しけよ

其二



會本立成事六八



會本立成事六八

環園と去く執略は赴く籍

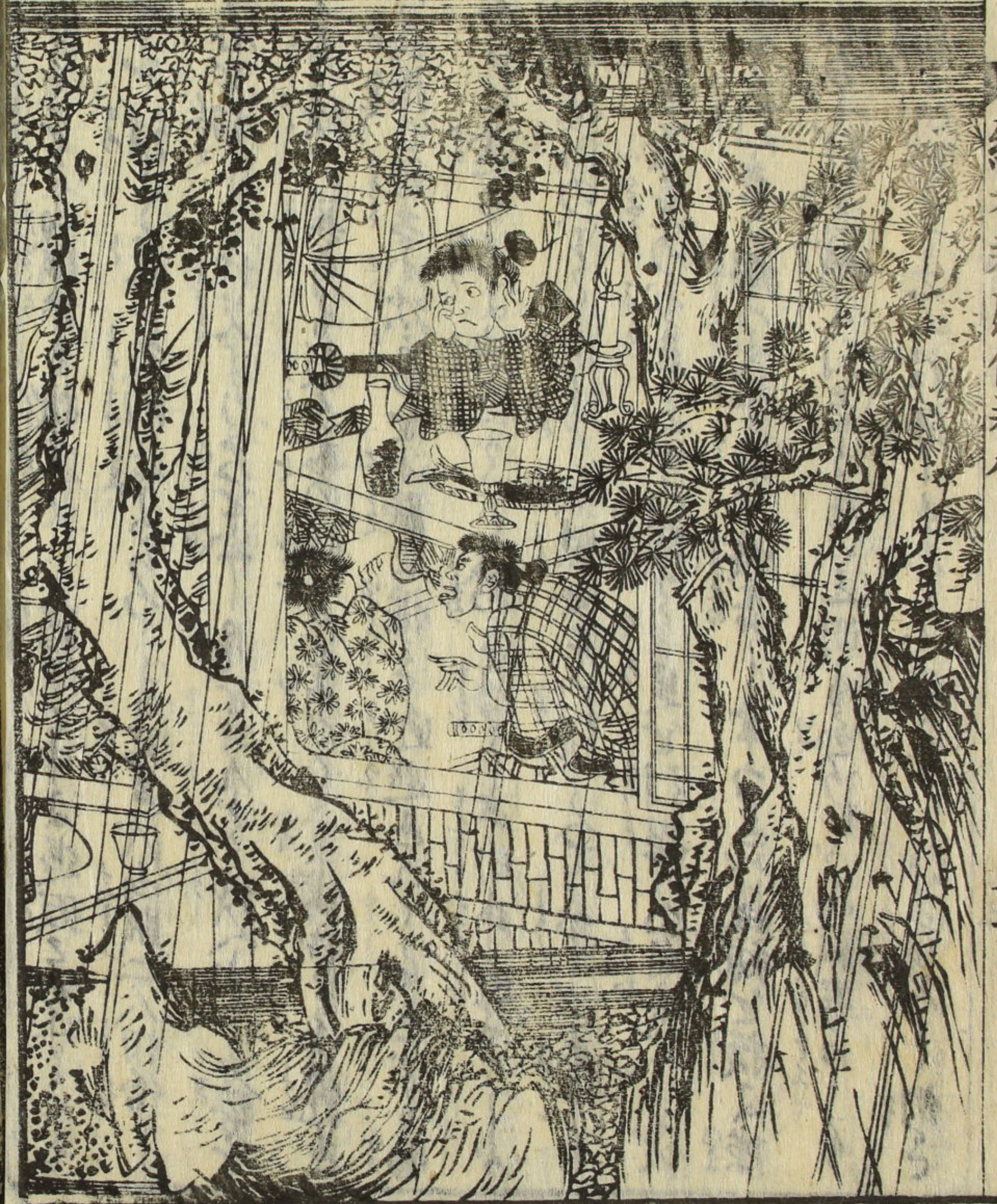
那く嫁威若くは止り人希るる歎はおおく駕籠と雇ひ坂路と
 急ぎて旅人と為るは美かえん血はあつて死居たりしうぢ奈
 驚きけるを歎長は昔々まは歎人馳躍く高談とるはくはども
 困所姓名とあると徳の品もろく又討るるものも介助るるご
 色ども正しく後ひく歩人が刀を佩ると親しく多るは小刀一た
 りは幸変し子細く居居せり有在清の風同とすて如く永
 懐中せり物件を溪間と遺し人の目と苗よりしよと初りく
 安堵の心と反し爰はおおく春味が腰物の装は用ひたる而
 の金銀を剥くは潰金とく之と代りて旅装と括ひぬらん

長寺の家士山田助右清の方より到り傍輩の終云ふは
 家秘は誰ましく智弁と震うく仰り申すはは官
 の紙分と託し山田のえ末老實の士るまは萩田が洞と定と
 紙は窮と極むの公たり一議も及ば洋諾して家形又苗を
 一月餘りとしは内鷹方の小吏はたありしはまると諸有司り高
 議し萩田と薦く其職は然も尚頼は遇し物身の形は皆
 待りける却親春味右近が妻を夫の退去と披露しよの令を
 待りける罪と同は在泉相おとるは子細く石はせん
 の恩令と承り大は安堵の心とるは其法寺と具は書母の
 親信する老僕矣田孫助は云合の竊は違とく加賀乃園
 晴はる見九所右清の方へ書はせしは萩助一月半くは切り

有り私衆を日とて、彼地へ集りしは主君未彼地は涉出る
 ことより、数日相待し、今も有り、涉者信も有り、故涉見は
 在清の相傳あるは、主君勝沢とあり、涉り何んは、何の及と
 涉越何るとも、之を早涉者信の有るは、許多の日を待し、今も
 之を便宜の同するは、思ふ子細何りて、亦は此西へ越し、又途
 中よおろく、交車の中ありし、其の何れも、何れも、主君の涉り
 初まざるは、えくけ地より、移るの然るは、速くは伏中、東
 りしと、今何り、故又その夜と日と、待し、地傳り、いと、息も、待し、
 亦は述し、環胸を穿り、移る便り、と、同地を、端も、け、何れ、
 續く、多見も、何り、且、良人、傳く、云、玉、強ひ、り、り、も、何れ、
 亦、く、地、圖、の、中、に、あり、と、あり、は、こ、あり、は、亦、も、急、は、越、は、越、
 伯くは、高、謙、く、く、其の、安、否、と、捜、求、る、こと、專、要、る、こと、候、は、三、
 本、大、助、よ、之、の、教、と、若、退、去、の、事、と、清、く、は、三、本、も、か、た、
 不、審、致、る、事、る、ん、は、卒、と、こそ、急、ぐ、ん、は、君、の、圖、を、待、し、
 亦、く、も、る、速、く、は、是、何、ん、は、一、は、素、能、く、本、の、日、も、亦、と、
 亦、の、在、西、知、ま、る、は、素、能、く、勢、く、内、系、の、吹、拳、と、人、の、間、受、く、
 集、通、り、る、ん、は、次、と、難、く、は、諸、の、環、力、と、は、く、急、く、居、身、と、取、收、
 要、の、最、く、及、び、夜、類、と、は、何、れ、是、と、馬、よ、負、せ、今、年、八、歳、の、小、
 次、身、と、は、は、府、費、の、取、系、若、僕、夫、田、後、助、と、は、移、り、く、遠、く、の、後、
 涉、よ、を、越、し、け、り、か

環母子賊難は、遇ふ難
 亦く、春、陰、の、妻、環、と、本、圖、と、出、く、日、と、ま、ま、の、信、濃、を、經、て、死、
 亦、く、春、陰、の、妻、環、と、本、圖、と、出、く、日、と、ま、ま、の、信、濃、を、經、て、死、

小次郎
賊巢
捕る
目



新編源氏物語

五

んとする所と環とさば山賊が腰刀と奪ひ取例はるがう羅討
 する股と切付刀と接ぐま向人へ山賊等大又怒りて小賢こそ
 女よと接つて切ぐを環へえままの術と習はし上死と極
 めく仰ぐあるまは精神たは十倍し先を心大男のま向と切
 付行をもんて付合ぐま又二人と切例せし何とてせん是乃
 三而と踏換し行勝と打ち勝てく山賊はうと死せど股
 又取く掴みんとする所は小治と未八歳の小腕とまも母の老爪
 見く物陰より走り出山賊が死傷したる山刀と死より早く彼
 山賊が股と切付たり賊益怒と皮し魚と小毒が仕業をせ勢
 掴み小治と引掴とて逃去り環見るとり奮然と牙と齒
 らせ踏し賊と奪ぐ又切散し死傷のてく逃匿しは早松の

も夫とく小治身へ固殺多の賊等も何とてうは行々人敢てあ
 らさるへ相人のてく走り自まど不意素肉の山路を走る勇あ
 も介給く強又時刻も相移まて音子も必置賊の身は定せられ
 しく人頼西のまは行方なく音子と夫ひ家来と付せ何の心も有
 て獨り歩らぶとて刀と取直し掴み突きんとせし再ひるを
 思ひ承着けりて死せし誰有く良人の安否を尋ね音子の
 教と付るの何んや案するは山賊の棲も安とさるのをさるふ
 まいぬ何よとて馬牛し小治身が死生を極め其後よとせ
 膚知も何んといふ方と見ると打能る嘴く下弦月樹圓よのま
 て映と力とて衣紋撫接ひ細くも只一人ありて山へとそそ
 ゆりぬ影く山賊等ハ女と刃傷り急ぎ目よ今も荷物と奪う

遠くは賊軍は馳ゆるし一人の山賊小次郎と大勢の中は引
 出け小幡を帯ひ馳けたるは赤教さんと連ぬしが熟視まを極
 終業まで教に懐く一方へを連ぬ賣んと云ふや小次郎と
 知りし赤の春城ををく云武士のる之屋をく故等と捨てし
 是れはし教に教せ替く奪り清と号りまは上座ありし賊
 色を奪りたるは南宮宗は社官一孫の春城氏にてはひびや
 小次郎所願首とさうし見く赤國を多りたるへいなる者を賊首
 意の座をとりて小次郎と教ひ赤の信筋のそのよて心算の指を
 宵と命と失んとせしと大爺の赤教ひよて免ましその今熟業
 は隔まても其内の子園をく云は赤公易之孫の孫の良人と云て
 行先人送り布け糸とせんと初と改めく傳これハ赤城を奪りて

昔くは懸かく其夜とをぬけふ

小次郎不意高山に到る後

陰謀は冥くは積りて子孫は遺に赤賊謀の最悪なるそのり
 春城が知子小次郎の必死をかくて横綱は隔し不意も賊首
 は脚らまし由縁と為るは佐村小次郎も父右近東國下向の折
 極木曾初よおぬく一命を助せし云教の少奉出ま備と云ふの示
 後故にまを去替く困くを遍歴以と雖も教の者もまを仇湯は
 遠くの業もるく再び不意と起し是は山賊の業は入教奉を
 終く今ハ山賊のそ成とるけ地は隠さく佐末をるやまは夜類
 全積と掠奪すく湯と凌はし不意春城が知子よ出舎一夜其
 業は宿一夜はよぬく赤患を清小賊と道中の歩人のまを打拵



世に竊ひはせりて曰く夜後ひ来りし少年の人き赤國人の令息なり
 是ハ勝沢之送届くる也汝等警切に傳へ被地は律ひ違はせよ
 是もいとも尋く此新法斗のそのるまは自然勝沢にて不審と交
 へ却て鶴と引出さん熟るすはけ地より間乃と傳へ山嶽は往き
 今衆ふ更の以ハ勝沢の村城はより着るべし途中にて夜の時
 と待人家の記出人村分と斗り宿務荷物等と捨棄す近所
 乃と教へ示し其後小法所よりと告るまは小法島推言も母
 の新法とを尋るく心ひくくと昨夜より賊等の漢語を聞はる
 切きまをく近所りし状は是は必室母の身はあまあはじしを
 早く勝沢は赴き伯父と新と告るも南も斗ひあるべし中
 揮は任せし小賊小法とを肩懸しよ事奪ひ取し荷物被を

盡く推連く死も歩人の旅客と送る状は似せ一齊に山を打
 候望の漢者と仲間たを求め只信しよ事奪はるるは賊は捨置
 歩も亦えんとそよ以日己は暮く一の文法は牙をる在りや社を
 たの方をえんとはくは是より何くまど物も毎直し通はるま
 ハ能も熟せきと危角く刻と移せり小法島是をきて一人の小
 賊と何汝等物と潜迷ひしと尋るり初る時ハ一心に主神林を
 初り教へ任せく在りもたへも初と問答ぬ何故たはせるといふ
 小賊福ともと拍負く子よ奪へらとて漢語を傳ふるは勝は
 ろり来るがし連も尋くがどとて不長その神の所あるべし何
 ばと杖と小法はよ漢語小法はるる一かた氏神を初念し赤性
 是も二方と奪へ移しと服と困くもと教へ杖は右の物を指し例

是より皆く大なる恨み神へ申しの頭より富むか奉の賦務を
 るまは終ふ不返」と彼乃と指し分りて後種をかくる人
 すとそとく荆棘路と塞ぐの道もろくぬりて通せしむる
 勇て引福又明方よ山と離れ二の田野より出たりまは
 と刃るよふよえし猪沢のをまよもあはれ何とやらん目別
 林のまき束るよまはる大の喰りにはまよぬりて土地の
 進るよ彼方より農民二人出たり引遠ひし由持る
 眼と付何るひん推し大竹の竹とさく吹るよと降て其
 所は所より大勢の農民聚り来り云流れ遠しよ小狐等
 集りて赤い丸弾のさゆ下り人を送りて猪沢へ引る
 故乃と沮さるよと四りくまは農民ホ大よ笑ふ夜社丸

るよと知は神は木が持死の荷物去ぬる夜旅人を犯し
 本貝渡りより引給く官所へ引付せしと云ふ早く毎
 鋤鉄と捲くおてをよ小狐木の外は移りて加勢荷物
 捨給と奪うく近出せぬ農民ものごとく退りしよ
 駕勢の肉よりけ物の主は男赤之無負の初聲せし
 又唯是共は人の者多くはし駕勢の肉と刀を殊はけ
 其夜婦人と相奪る移るよか奉の内なるまはる其夜
 此田所も今よけ地は在り内身の粉清と搜りし先付
 有く對面何とと種くは里人伴ひしよ小狐は多見し
 る限るよ是や氏神の冥冥よりけ地へ送せしよ
 かよも流く伝と能し三男よは人せよまはる給本

